

[論文]

与謝野晶子の関東大震災復興の旅～石山から宇治へ

小清水 裕子

Yosano Akiko's Journey of Reconstruction after the Great Kanto
Earthquake: From Ishiyama to Uji

Yuko Koshimizu

キーワード： 与謝野晶子、関東大震災、復興、石山、源氏物語

Key Words: Akiko Yosano, Autumn Great Kanto Earthquake, reconstruction,
Ishiyama the Tale of the Genji

要約： 与謝野晶子の「石山から宇治へ」の旅（大正13年10月12日から16日）は、関東大震災後、晶子が被災してから初となる関西方面への旅であった。この旅について、関東大震災に被災した晶子の復興という観点から考察を進める。

まず、関東大震災で被災した晶子の著作から晶子の被災の心境を明らかにする。そして「源氏物語」口語訳が灰燼に帰したことは晶子にとって、いかに大きな衝撃であったのかを示す。また、「石山から宇治へ」の旅の一番の目的地が石山寺の観月であったことを指摘し、この石山の旅が晶子にとっては関東大震災からの心理的な復興の旅であったことを論じる。

与謝野晶子の関東大震災復興の旅～石山から宇治へ

はじめに

関東大震災（1923年（大正）12年9月1日）で被災した与謝野晶子は、自身と家族の命に別状はなかったものの、その文芸の活動においては大きな打撃を受けた。まず、夫の寛（鉄幹）とともに主幹する新詩社の雑誌「明星」（明治40年に一端休刊となっていた。大正11年11月に約15年の時を経て、やっと復刊を果たしたばかりであった）が、震災の混乱で翌大正13年5月まで休刊を余儀なくされた。一時的とはいえ、主たる文芸の場を失ってしまったことは何にも代えがたい衝撃であった。また、最も晶子にとって痛手であったのは、大阪の小林天眠に依頼されていた完成間近の「源氏物語」口語訳原稿の被災による焼失である。関東大震災当時、晶子は東京・駿河台の文化学院の教授であり前述の「源氏物語」口語訳原稿を文化学院に置いていたため、文化学院と共に灰燼に帰してしまったのである。

被災後の晶子は、新詩社の門弟や多くの人々の支えもあり、生活基盤立て直しをはかっていった。大正13年の年末には被災した東京・富士見町の自宅に代わる与謝野夫妻の活動の拠点となる「采花荘」と名づけた家を下荻窪に建てている。

一方、晶子の健康面においては被災の疲れもあり、大正13年の春3月に中耳炎を発症し、森鷗外の友人賀古鶴所の病院に入院してしまう。しかしながら、入院中も歌を詠み、夫・寛と共に「明星」の復刊に向けてエネルギーをかたむけていった。そして退院後の5月には短歌集『流星の道』を新潮社から出版した。その「自序」には被災と病気のことと落ち込んでいる心境が示されている。

私は去年の大震に死を免れ、また此春の病気からも回復しましたが、以前から短命の予感される私は、かう云ふ風に歌ふ時がもう幾年も無い気がします。「流星の道」はやがて小さな個性のはかない記念として永遠の幽闇に消えてしまふでせう。

少しばかり人生をはかなんだ趣が感じられる。人生はいつ何時、何が起きるかわからないし、それは「有限」であることを震災と病によって思い知らされた晶子の心境であろう。そしてこの『流星の道』出版翌月である6月に、震災で止まっていた「明星」の復刊を果たすこととなる。「明星」復刊後の晶子は寛とともに積極的に旅に出て、新詩社同人をはじめとする縁者と会い、各地で歌を詠み、時には揮毫をした。こうして復刊した「明星」に晶子はその活動を知らせ、新詩社の活動を盛り上げている。具体的には大正13年7月は山梨、8月は新潟、9月は宮城、そして10月は関西地方の石山から宇治を旅した。

この震災復興の気運の中で訪れた、大正 13 年 10 月の滋賀県琵琶湖湖畔の石山寺から始まって宇治に至った旅は震災後初となる関西方面への旅のなかでも、とりわけ、石山寺の訪問は、「源氏物語」口語訳原稿を焼失してしまった晶子にとっては特別な意味を持っていたと思われる。

以下に、晶子の経験した関東大震災被災体験とその復興に注目し、石山寺の旅を取り上げていく。

1 晶子の関東大震災被災の歌

まず、晶子の被災体験について述べておきたい。関東大震災発生時、晶子は家族と共に東京・富士見町の自宅で被災した。晶子はじめ家族は幸運なことに怪我もなく、自宅も焼失は免れ無事であった。晶子の一家は無事であったものの、人の生死の残酷と、焦土と化した東京の荒廃に心を痛めた。このような晶子の被災の心境は晶子の作品から直接伺うことができる。晶子の被災に関する短歌作品については大正 14 年 1 月にアルス社から刊行された『瑠璃光』に 54 首連作（全集 2 1 7～2 7 0）で採られているので以下にその冒頭と末尾の歌を二首ずつ示す。（番号は勉誠出版『鉄幹晶子全集』による）

○冒頭

217 大地をば愛するものの悲しみを嘲める九月朔日の天

（初出「国民新聞」大正 12 年 10 月 26 日）

218 休みなく地震して秋の月明にあはれ燃ゆるか東京の街

（初出「大正大震災大火災」大正 12 年 10 月 1 日）

○末尾

269 かくてなほ無限のと時をもつことに誇る自然のうとましきかな

（初出『瑠璃光』）

270 焦土よりすでに都の興るとよわれの築くはそれに似ぬかな

（初出「国民新聞」大正 12 年 10 月 26 日）

さて、この晶子の歌集『瑠璃光』での歌の配列は、歌の掲載紙誌の日付発表順などには特にこだわっていない。上掲 2 1 7 「大地をば・・・」は 10 月 26 日「国民新聞」掲載であり、次の 2 1 8 「休みなく・・・」は 1 0 月 1 日刊行の『大正大震災大火災』である。

そこで晶子の震災に関する歌の発表について、その発表日付順に整理し、『瑠璃光』への採録状況を以下に整理する。

I 大正 12 年 10 月 1 日（以下の 5 誌に合計 45 首を発表）

- ① 「天變動く」 (『大正大震災大火災』) 10 首 (うち 7 首『瑠璃光』採録)
- ② 「火の後」 (雑誌「カメラ」) 10 首 (うち 7 首『瑠璃光』採録)
- ③ 「恐れの中に」 (雑誌「現代」) 10 首 (うち 5 首『瑠璃光』採録)
- ④ 「短歌五首」 (雑誌「女性」) 5 首 (『瑠璃光』不採録)
- ⑤ 「災後」 (雑誌「女性改造」) 10 首。(うち 5 首『瑠璃光』採録)
- II 大正 12 年 10 月 26 日
 - 「震災呻吟」 (「国民新聞」) 15 首 (うち 12 首『瑠璃光』採録)
- III 大正 12 年 11 月 7 日
 - 「悪夢」 (「婦人世界」) 10 首 (うち 5 首『瑠璃光』採録)
- IV 大正 13 年 6 月 5 日
 - 『大正大震火災誌』 再掲 (I～IIIの合計 70 首の中) 28 首、
初出 10 首 (うち初出 10 首『瑠璃光』採録)
- V 大正 14 年 1 月
 - 『瑠璃光』初出 3 首

ここで注目すべきは『瑠璃光』の震災に関する歌 54 首の連作のうち 217「大地をば・・・」から始まる冒頭の 38 首の連作については、すべて大正 13 年 6 月刊行の改造社『大正大震災火災誌』からの引用であることだ。『瑠璃光』が大正 14 年 1 月に刊行されたことから、晶子の被災の歌についての原稿は、『瑠璃光』と一番近い時期に刊行されている講談社の『大正大震火災誌』から抄出したものを利用したのではないだろうか。上記で『瑠璃光』における晶子の震災の歌の採録状況を整理したが、その I～IIIは震災直後の大正 12 年に発表されたものであるが、『大正大震火災誌』だけは時期が半年以上遅れてのものであり、『瑠璃光』を編んでいる時期と重なっていたことが推測できる。さらに『大正大震火災誌』は I～IIIの再掲歌が 28 首あり、それまで I～IIIで発表された 70 首から晶子自身が精選していると考えられ、晶子が自らの意思で震災に関する歌を整理したある一定程度の結果であると考えられる。そして『瑠璃光』の震災に関する歌のうち、『大正大震火災誌』以外から採られた残りの 16 首を見ると、比較的まとまったかたちで「火の後」(雑誌「カメラ」)の 7 首が採られている。

『瑠璃光』での被災の歌は震災第一日目の「九月一日」から始まって、震災の火災の後に灰燼に帰した場面に焦点を絞った上記の「火の後」を連続するように『瑠璃光』で配列していることは時系列的にも矛盾はなく整えられている。しかし「火の後」は発表自体は上述で整理した通り、10 月 1 日発表となり、決して作歌の時系列的推測としては遅れての作歌とはならない。一見、作歌の時系列に従うように見せかけて、ここで「火の後」をまとめて採っていることは、晶子の恣意的なものと考えられる。

それでは「火の後」が『瑠璃光』においてどの様に配列されているかをここに示す。
(番号は勉誠出版『鉄幹晶子全集』による)

- 256 帝王の都の灰となりしのち空行く雲もあはれなるかな (I-②)
- 257 ニコライの四壁の上の大空を雲ぞ流るる覗きに寄れば (I-②)
- 258 天変のいと大きなるものに逢ひさらに寂しき心となりぬ (III)
- 259 禍を与へて心たのしまぬ空のけしきとかつあはれなり (V)
- 260 あな悲し逆まに地の回転すいかにかならんいかにしてまし (V)
- 261 きはだちて真白きことの哀れなりわが学院の焼け跡の灰 (I-②)
- 262 焼けはてし彼処此処にも立ちまさり心悲しき学院の跡 (I-②)
- 263 十余年わがかきためし草稿の跡あるべしや学院の灰 (III)
- 264 わが心旅人よりも哀れなり焼けたる後の駿河台行き (I-②)
- 265 あぢきなきこの焼土に東京の芽のいでんとも思はれぬるかな (I-②)
- 266 ニコライの塔のかけらにわれ寄りて見る東京の焦土の色 (I-②)

これらの歌を連鎖的な展開で捉えると、256「帝王の・・・」は、帝都東京という漠然とした都市が俯瞰的に述べられ、257「ニコライの・・・」では「ニコライ聖堂」に「覗きに寄った」、つまり駿河台の文化学院に富士見町の自宅から行く途中で立ち寄ったことがわかる。その文化学院に向かう時の心境が258「天変の・・・」の「さらに寂しき心となりぬ」であり、259「禍を・・・」の「あはれ」である。そしていよいよ文化学院が灰燼に帰していることが実景として眼に飛び込んで、260「あな悲し・・・」と、思わずあふれ出た叫びが表現されている。この「あな」という接頭語を用い、最上級の「悲し」さを直情的に表現していることから、また、「逆まに地の回転」といった表現から、非常に強い衝撃が晶子を襲ったことが理解できる。そしてどうにかしたいのにどうにもならないことに対する苦しみを「いかにかならんいかにしてまし」と吐露している。では、その晶子の衝撃的な悲しみは何であったのか。それは261「きはだちて・・・」、262「焼けはてし・・・」に表された真っ白な灰となってしまった文化学院の姿であり、さらに263「十余年わがかきためし草稿の跡あるべしや学院の灰」の通り、いまはもう焼けてしまって取り返しの付かない「源氏物語」口語訳原稿が灰となってしまったことなのである。その絶望の大きさが264「わが心・・・」で「哀れなり」で表現され、259で抱いた「あはれ」とは表記も違った形で表現し、我が身に起きた「哀れ」をしっかりと表現を分けている。さらに260「あぢきなき・・・」は、もう再生復興の兆しが見られないほどの落胆が表されている。

ここで「源氏物語」口語訳原稿の喪失ということに言及するならば、「あぢきなし」は「源氏物語」冒頭部「桐壺」に「唐土にもかかることのおこりにこそ、世も乱れ、悪しか

りけれど、やうやう天の下にも あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて・・・」といった表現にも共鳴するのである。

この灰燼に帰した文化学院と「源氏物語」口語訳原稿の焼失といったあまりにも強い衝撃に耐えられず、まともに立ってられない晶子の様子が、266「ニコライの・・・」に表れている。

つまり、晶子にとっての被災は、皆無とまでは言えないが、何より「源氏物語」口語訳原稿の焼失は晶子にとってはかなり大きなものであった。この件については、逸見久美は晶子の「源氏物語」口語訳原稿の焼失について「ショックが大きかったゆえ、思い出すこの辛さ」があったとし、「原稿焼失の歌が二首しかないことがなよりの証拠」として以下の歌を指摘している。

十余年わがかきためし草稿の跡あるべしや学院の灰（『瑠璃光』263）

失ひし一万枚の草稿の女となりて来りなげく夜（「婦人の友」大13・1）⁽¹⁾

晶子のこの「源氏物語」口語訳原稿の焼失については大正12年10月8日「婦人世界」で「大切な原稿を土ふかく埋めておけばよかった」と題する随筆を発表して、焼失の無念を述べている。

このような状況を夫の寛は被災直後の9月4日小林天眠（政治）に宛てた書簡⁽²⁾の冒頭に、（下線は筆者が施した）

神田、日本橋、京橋、麴町の八分、浅草、下谷、本所、深川等ハ全焼致し候。ご心配のみ相掛候荊妻の「源氏」の原稿も一切文化学院と共に焼け申候。

啓上

大地震と共に起りたる大火災のため、東京ハ全市の七分を焦土と致し、死者五六萬と申す惨状に候。諸旺盛一家ハ幸にも半町程の處にて風向き一転し、火災を免れ、一人の負傷者も出さず、二夕晩は牛込の土手にて被難仕り

このように先ずは「源氏物語」のことを記している。夫の寛からしても、晶子の「源氏物語」口語訳原稿の被災の衝撃は、非常に大きかったことが明らかであり、また、与謝野夫妻のよき理解者であり支援者である天眠も、この晶子の「源氏物語」が焼失したことの落胆が共有できる相手であるからこそ、書簡の冒頭部で事の一大事を先ず告げているのである。

2 晶子と「源氏物語」～「源氏物語礼讃」

晶子の関東大震災の被災においては、「源氏物語」口語訳原稿の焼失の衝撃が大変大きかった。そこで関東大震災前の晶子の「源氏物語」への取り組みについて、遡って整理しておきたい。

明治41年11月に100号をもって終刊となった「明星」だが、その復刊は、与謝野晶子や夫の寛はじめ、新詩社の門弟からの強い要望もあった。そこで新詩社の発表の場の確保の必要もあって、大正10年11月に「明星」が復活した。この大正期の「明星」の通巻3番目となる大正十一年一月号、すなわち「明星」復刊後、初の新年号に相応しい歌として、晶子は「源氏物語礼讃」を発表したのである。この「源氏物語礼讃」は「源氏物語」五十四帖、各帖をテーマにしたものを晶子が54首詠んだものである。つまり、この54首の「源氏物語礼讃」歌を新年の歌として発表する意義は晶子の「源氏物語」口語訳に対するひとつの決意表明と「源氏物語」口語訳に寄せる意欲の表れである。そもそも晶子にとって「源氏物語」は少女時代より最も身近な日本の古典文学であった。晶子自身は「私が歌を詠み始めた動機」⁽³⁾において、

十歳位の時から歴史類や文学類の書物を家庭に秘密で読む中に歌の集や俳句の集をも読んでいました

と、述べている。ここで言う「書物」は、晶子の大阪・堺の実家の蔵書を指す。晶子の実家は「駿河屋」という和菓子屋を営んでおり、比較的裕福な家庭であったために、父や兄の蔵書が手に取れる環境にあった。晶子旧蔵の寛文年間(1661~1673)の絵入版本「源氏物語」30巻(鞍馬寺蔵)も認められている。また、佐藤春夫の『晶子曼荼羅』⁽⁴⁾の冒頭部分である「十五の少女」には晶子が樋口朱陽先生の漢学塾に9歳から通う動機が説明されている。晶子の女学校の小田先生から「源氏物語」の元になった話は中国の古典「長恨歌」であることを知って、「長恨歌」を学びたくなったのである。

そして青春時代の晶子にとっては「源氏物語」はより身近なものとなっていた。「源氏物語」の女性を例にして、どの様な女性に興味があるのかを近い男性に問うている。まだ、晶子が鉄幹に直面する前の明治33年3月5日、大阪・堺の覚応寺の河野鉄南に宛てた書簡⁽⁵⁾に(下線は筆者が施した)

あなた様源氏を御あいどくあそばすよし御なつかしくぞんじ上参る候 あなた様かの物語の女性のおほきな中に誰にもつともおほく同情をよせさせ給にや 承らほしく存じ候 それにて御理想のおはすところ伺はむなど云ふ野心あるにてはゆめおはさず候へどたゞ一寸きゝたきのに候 私は上なき色の紫の上よりも宇治の大姫君がうらやましく候 かほるの君程の人をあれ程に泣かしてあれ程に思はれてそしてはやく死で

いつまでも余韻ながく恋はれてあのやうにおもはれてこそと私はぞんじ参候 その艶なる君のそのこふ二字に無限の意をこめしこゝろの通じてや

また、引き続き 3 月 29 日に河野鉄南に宛てた書簡にも

源氏の事など申上たけれどけふはさる余裕がなく候 宇治の大姫君よりもかほるの君の方に同情をよするは私にも候 私はたゞうらやましいと申すせしに候 あのやうの人にあれ程おもはれてそして人の心のあぢきなき末まで見で死にたいと申せしに候 同情をよする上から云へば羽ニおく露の木かくれてしのびしのびになきしうつせみのなどこそなと申上たき事もまた御こゝろとけての後の便にもと

このように、少女時代に学んだ「源氏物語」を晶子なりの人物解釈をもって、自由に表現できているのである。このような「源氏物語」に対する教養が基となって晶子の生涯三度にわたる「源氏物語」口語訳の偉業となるのである。

続いて晶子の「源氏物語」口語訳について簡単に整理しておきたい。まず、出版された晶子の「源氏物語」口語訳は明治期には『新訳源氏物語』、昭和期には『新新訳源氏物語』がある。そして、大正期には関東大震災で被災して灰燼に帰した幻の「源氏物語」口語訳の存在がある。

まず初めに出版されたのは明治 45 年から大正 2 年にかけての『新訳源氏物語』であり、次に出版されたのは昭和 13 年から 14 年にかけての『新新訳源氏物語』であり、両者の成立の間は四半世紀をまたいでいる。まず、『新訳源氏物語』に対する晶子の思いは、昭和 14 年 2 月出版の『新新訳源氏物語』（金尾文淵堂）の「あとがき」に晶子自身が述べている。

燦然と千古に光る東洋文学の巨篇源氏物語の価値は今更説く必要もない。

私は今を去る二十八年の昔、金尾文淵堂主の依頼に由って源氏物語を略述した。新訳源氏物語が其れである。森林太郎、上田敏二博士の序文と、中沢弘光画伯の絵が添って居た。その三先生に対して粗雑な解と訳文をした罪を爾来二十幾年の間私は恥ぢ続けて来た。いつかは三先輩に対する謝意に代へて完全なものに書き変へたいと願ってゐたのであるが実現は困難であった。

この『新訳源氏物語』は森鷗外が中心となって、与謝野寛・晶子の渡欧の金銭的な支えにもなる仕事として、晶子が執筆する形で取り組まれたものであった。その本の出来栄えは大変美しいものであった。夫妻の渡欧と同時に成されたものであるため耳目も集めることとなった。しかし、晶子はそれに決して満足していなかったのである。実のところ、晶

子はこの『新訳源氏物語』を出版する以前より、「源氏物語」口語訳を小林天眠の天佑社から出版する依頼を受けており、天眠はその原稿料として毎月二十円を明治 42 年から大正 7 年まで支払っていた。これは与謝野夫妻の渡欧資金や生活資金を支えるために貴重な財源でもあった。従って『新訳源氏物語』が出版されても引き続き、天眠依頼の「源氏物語」口語訳の作業は続けられていた。(天佑社が大正 11 年に倒産するが、その後も口語訳作業は続けられていた。)そして、『新訳源氏物語』を超える訳を晶子自身も目指していたのであった。だからこそ、関東大震災の前年の大正 11 年 1 月「明星」に晶子は、「源氏物語礼讃」54 首を年頭の決意表明のような形で発表したのであろう。この「源氏物語礼讃」は関東大震災の翌年、大正 13 年 5 月に、被災後初の晶子歌集『流星の道』に収められた。そしてこの 54 首の歌は『新新訳源氏物語』の 54 帖の各冒頭、扉部分に添えられて、晶子の念願だった「源氏物語」口語訳が完成した。その感慨を晶子は『新新訳源氏物語』「あとがき」において、「いよいよ本が出るようになって私は滅罪の方法の許された神仏に合掌した。」と述べている。

3 「石山」の旅

3-1 旅の目的地について

晶子は寛と共に震災の翌年、大正 13 年 10 月 12 日から 16 日にかけて石山寺から琵琶湖疎水を通り京都、宇治への旅に出た。この旅については、大正 13 年 11 月「明星」の「一隅の卓」に詳しい。

□近江石山の月を観たいと云ふ良人の発議で、十月十二日の朝の汽車で東京を発ちました。同行は高木、関戸、奥田三氏の外に、二科会の用で京阪に行かれる山下、正宗両画家も加はられたのでした。名古屋で更に伊藤、長司の両氏を加へ、大津で下車して、夜に入つて石山の宿の柳家に着きました。思つて居た通りに非常によい月夜でした。柳家へは既に岡山から正宗敦夫さん、大阪から田村黄昏、森繁夫の二氏の外に、丁度滞阪中の石井柏亭さん、京都から萬造寺齊さんと云ふ顔触が先着して待受けて居て下さるのでした。・・・私たちの後から京都の小林氏御夫婦も尋ねて下さいました。其晩は石山寺の門を開けて貰つて観月台の傍で暫く陰曆十四夜の月を眺めたりしましたが、話の方がはづんで予定の歌会は開かれずに済みました。小林御夫婦の外は皆柳家に泊りました。

「一隅の卓」にはこの旅行の顛末、もちろん、10 月 12 日の石山寺での観月の様子が詳しく書かれている。10 月 13 日からの旅行の行程は石山寺よりもやや簡潔にまとめられている。それによると、出入りを繰り返しながら、10 月 13 日は琵琶湖を舟で三井寺に行

き、その後疎水の舟で京都に向かい、京都・木屋町の藤岡旅館に宿泊。10月14日は宇治に向かい、浮舟園に宿泊し歌会を開いた。10月15日は夕方に宇治から京都に向かい、京都から夜汽車で東京に向かった。10月16日の朝に東京帰着。となっている。

「一隅の卓」で晶子は、この旅行は寛が発議して行われたと述べている。その発議の経緯については、小林天眠に宛てた寛の書簡⁽⁶⁾から伺うことができる。

① 大正13年9月15日

大連よりお帰りなされ候頃小生夫婦と外に一兩人にて石山へ一泊（柳屋）歌を詠み候計画につき、その節一寸お伺ひ致すべく、久々に皆様にお目に懸かり得ることを喜び申候。但し石山に一泊あとハ苦樂園に一泊して帰路につき申候確定に候。

② 大正13年10月8日

さて石山へハ十二日に参り同夜と翌夜二日歌を柳家にて詠み度と存じ候。同行ハ東京より小生夫婦の外に四人、名古屋より伊藤君外一人に候。之に御地の萬造寺齊君、大阪の清水卓治君、岡山の正宗敦夫君、大坂滞在中の石井柏亭、荻野綾子二君が来会の筈に候。

右終わつて更に奈良か、苦樂園か、宇治かに一泊して帰郷致したき計画に候・・・晴雨に関らず出発し、月が無くバ雨を石山にて聴き申度候。

これらの天眠に宛てた書簡①②と「一隅の卓」に示された実際の旅程に共通しているのは、石山（寺）に行き歌を詠み、石山寺の麓の柳家に宿泊することである。つまり、この旅行の主たる目的が石山寺ということである。書簡②では「晴雨に関らず出発し、月が無くバ雨を石山にて聴き申度候。」と重ねて、天候に関わらず石山寺に必ず行こうとする寛の強い意思が示されている。また、石山を訪れた後の旅程については未定であることから、まずは石山寺が第一の目的地であることが理解できる。書簡①では神戸の苦樂園を予定し、②ではその選択肢を広げて、奈良、神戸（苦樂園）、宇治を旅程の候補としているに留め、いずれも目的地としての確定はしていない。つまり、確実な旅の目的地は石山（寺）なのである。

3-2 石山寺の観月

石山寺は「近江八景」の中のひとつ、「石山秋月」の地となっている。「近江八景」については、中国の北宋時代に、宋迪の「瀟湘八景」画の流行が日本にも渡り、近江八景が選定されたとされている。その近江八景は現在の滋賀県琵琶湖湖畔に点在している「石山

秋月、瀬田夕照、栗津晴嵐、矢橋帰帆、三井晩鐘、唐崎夜雨、堅田落雁、比良暮雪」である。滋賀県の「近江八景」の説明⁽⁷⁾は次の通りである。

約 500 年前の室町時代に、中国湖南省にある洞庭湖の八景にちなんで、関白近衛政家が選んだと伝えられています。浮世絵師の安藤広重の風景画により広く知られるようになりました。

それでは江戸時代の浮世絵で描かれた「石山秋月」を歌川広重「近江全八景図」⁽⁸⁾、房種「石山秋月」⁽⁹⁾を以下に示す。



図1・歌川広重「近江全八景図」

図1では石山寺で紫式部が近江八景を眺望する姿が描かれている。石山寺は古より、紫式部が「源氏物語」執筆した寺であると言われている。左の釣り鐘型の障子の見える部屋は「源氏の間」とよばれ、この場所で「源氏物語」が執筆されたとされている。



図 2・歌川 房種「石山秋月」

図 2 では、石山寺の麓に建つ建物の傍にひとの姿が描かれ、河畔近くには係留された舟が描かれている。この風景に見える一軒が創業寛政十一年の「柳屋」と思われる。現在（令和 6 年 2 月）、石山寺の麓に晶子一行の宿泊した柳屋はないが、料理屋「石柳」としてその料理は承継されている。参考として図 2 の浮世絵と似たアングルの江戸末期から明治初期の石山の写真⁽¹⁰⁾は以下図 3 である



図 3・写真 江戸末期から明治初期の石山の風景

このように「近江八景」の「石山秋月」として中世から引き継がれてきた石山寺での観月は当然、晶子はじめ、寛も大いに楽しみとするところである。そして、石山寺が図 1 に示したように浮世絵でも象徴的に紫式部を描き、「源氏物語」と深い縁の寺であることが周知されていたことをふまえれば、石山への旅は自ずと「源氏物語」を彷彿とさせる旅であるのだ。つまり震災で焼失してしまった「源氏物語」口語訳を誰もが思わずにはいられない旅であったはずである。しかも焼失してしまった「源氏物語」口語訳の依頼主である小林天眠も石山寺に赴いたのであるから、尚更のことである。また、石山寺の「源氏の間」について晶子は言及していないが、「源氏の間」を一行が案内されたことは、大正 13 年 11 月「明星」の「石山より宇治へ」の中で、関戸信次が歌に詠んでいることから明らかである。

源氏の間美男の沙門若くして尼と見ゆるが来て案内しぬ

しかし、晶子はこの石山寺において「源氏物語」に関わる歌を詠んではない。詠まなかった、またはショックのあまりに詠めなかったと言うべきだろう。この晶子の性分については前述の逸見久美の指摘からも想像に難くない。また、晶子には震災から復興するには、新たに作り直す、またははじめの一步から作る＝創造することを説いている。

晶子は「源氏物語」口語訳原稿が震災で灰燼と帰したことのショックのあまりに、ニコライ堂のかけらにたれかかった歌、

257 ニコライの四壁の上の大空を雲ぞ流るる覗きに寄れば

266 ニコライの塔のかけらにわれ寄りて見る東京の焦土の色

この歌から、ニコライ堂は屋根もなく、塔は崩壊してしまい、激しく損壊している姿がうかがわれる。このニコライ堂の震災復興にあたり晶子は大正 14 年 7 月刊行の晶子の評論集『砂に書く』（アルス社）に「廢墟の美」（初出・大正 13 年 7 月「明星」）と題して、廢墟の美は残すべきだが、一方で、中途半端な修復は望ましくない。むしろ新しく創造すべきと論じている。

ニコライ堂を修覆すると云ふ噂がある。明治以来の日本人は兎角に修覆してもとの美までを壊してしまふ。奈良其他の国宝仏の俗悪な修補は悉くその例である。ニコライ堂は今の侷で廢墟の美を保存して欲しい、青空の下の高台の上に、あの物寂びた半壊のお堂の立ってある大きな美しい姿は、私のやうな未信者にさへ敬虔な心を起させる。宗教家はなぜ其処に思ひ到らないのか。一体にどの被災地でも一二個所の廢墟を公共的に残して震災の記念にして欲しいものである。記念物として保存するのは好い。更に実用にしようとして修覆するのは失敗である。修覆に要する精力と財力とを用ひて全く新しく創造するやうにしたいと思ふ。

晶子のこの主張から伺えることは、中途半端な修復は結局もともとの美を壊す。ましてや実用となるとなさらぬことで、最善は「新しく創造する」ことである。晶子のこの主張は、晶子自身が震災で失った「源氏物語」口語訳の原稿をはじめとした、色々なものに対して感じるものであったろう。このような「創造」の視点で、晶子が震災時に観た「月」と「石山秋月」と称される晶子の観た石山の「月」は天体の一惑星としては物理的には同じ月ながら、復興、創造というバイアスの中では違った意味を持つ「月」となったのではないだろうか。

被災した晶子が詠んだ月の歌は、

218 休みなく地震して秋の月明にあはれ燃ゆるか東京の街

233 月もまた危き中を逃れたる一人と見えぬ都焼くる夜

239 空にのみ規律残りて日の沈み廢墟の上に月上りきぬ

である。石山寺での観月は、約一年前の被災の時に見た震災の恐怖におののいたあの秋の夜の月を、石山寺で執筆したと言われる紫式部も観た月へ。また近江八景の「石山秋月」へと新たに上書きし、被災の秋月から、ある意味文芸的世界に引き戻し、再出発する区切りとし、被災から解き放った新たな秋月の創造開始という役割を持っていたのではないだろうか。（晶子の石山で詠んだ月の歌の詳細は後掲後述する。）

3-3 旅に出る理由について

晶子が関東大震災で被災し、続けて大正 13 年の春に中耳炎を患って入院。その後快復した後には、寛と共に頻繁に旅に出かけた。これらの旅については、昭和 3 年 6 月刊行の『心の遠景』「自序」に晶子が自ら述べている。

「瑠璃光」を出してから五年目の今日、大正十三年八月以来の歌を取捨し、其中の一千五百首を此の一卷に収めて「心の遠景」と題しました。

この五年間に、良人や友人に従ひ、私はいろいろの所へ短時日の旅行をしました。近い所では、武蔵の金沢と氷川、相模の三崎と箱根、信濃の諏訪、軽井沢、碓氷、山田温泉、赤倉、野沢温泉、野尻湖、また日光、伊豆の熱海、遠い所では越後、佐渡、陸前の青根温泉、松島、羽後の十和田湖、陸奥の板柳、岩木山、弘前、浅虫、五戸、近江の石山、京都、宇治、大和の奈良、吉野、下野的那須など。従って此集には其等の旅中の作が多くまじって居ます。

この「自序」に示されている「近江の石山」の旅詠もこの『心の遠景』に収められている。被災の為に、自宅を東京・富士見町から市外の下荻窪へと移す多忙の中、晶子自身も特筆しているように、意欲的に旅に出かけたことは、被災後の「明星」復刊をもり立てていく上でも必要であった。日本各地の同人を訪れ、同人等を世話役にして、訪れた地域での新たな新詩社の同人獲得も旅の大きな役割であったと理解できる。

また、晶子の精神衛生上も、旅は必要なものであった。大正 14 年 7 月刊行の晶子の評論集『砂に書く』（アルス社）に「忙中の間」とい随想がある。これは初出が大正 13 年 10 月 12 日「横浜貿易新報」であり、「石山の旅」とほぼ同じ時期に発表されているものである。晶子はこの随想で所謂「命の洗濯」である旅は精神衛生上不可欠であるとしているのだ。

私達はこの贅沢を保有したい。之をさへ奪はれたら人生は牢獄である、苦役場である。私は孔子が偶ま小間を得て二三子と沂の温泉に浴し詩を微吟しながら帰って来るのを、人生最上の楽しみであると云った心持が、かう云ふ瞬間にだけ同感される。

愛、自由、平等、正義、創作、健康、其等のものが最大の楽しみしである事は云ふまでも無く、また其等の楽しみを実現するために苦闘する生活の厳粛なことも亦勿論であるが、そのために緊張した生活から、一寸の間解放されて、超越的な、無関心的な、砕けて云へばぼんやりとした心持で、今朝のやうな自然の平和の中に浸ってゐる事の楽しみは絶対の価を持つてゐる。此楽しみがあるので、人は次の瞬間から心の健かさを回復し、人間共存の相対的生活に更に奮闘する勇気が生じる。

睡眠が肉体の健康に必要であるやうに、功利を超越した、云はば草木と同じやうに日光に触れ風に吹かれて、自然と一体になった瞬間が心の健康に必要である。能率能率と云って「忙」の生活ばかりが強調されて居たら、人は頑廢衰弱して結局その能力を失ふであらう。是非も功過も忘れた「間」の生活の瞬間があるので私達は救はれるのであるが、現代の多数人にはこの瞬間の恵まれる度数が余りに乏し過ぎる。

3-4 石山の旅詠について

この晶子の石山から宇治への10月14日から16日の旅詠については、上述の「明星」82頁から91頁にわたって「石山より宇治へ」と題し、「その一」を関戸信次30首、「その二」を与謝野晶子は50首、「その三」を正宗敦夫14首、「その四」を高木藤太郎14首、「その五」を与謝野寛50首と、それぞれが発表している。晶子はまた、この時の歌50首のうち40首を昭和3年6月刊行の『心の遠景』に収め、さらに昭和13年5月の晶子の自選歌集「与謝野晶子歌集」（以下、「晶子自選歌集」と称す）においては、21首が収められている。

大正13年11月「明星」の「石山から宇治へ」の晶子50首の旅詠について歌の内容から以下に整理すると、近江を詠んだものは25首あり、そのうち石山を詠んだものは10首、琵琶湖の三井寺までの船旅を詠んだものは7首、三井寺を詠んだものは2首、京都への疎水の船旅を詠んだものは6首である。また、京都を詠んだものは14首。宇治を詠んだものは11首となっている。割合からも、滞在時間の長短に関わらず、近江の歌が多いことがわかる。その中でも石山寺の歌が10首と一番多い。

昭和3年『心の遠景』では大正13年11月「明星」で用いた「石山から宇治へ」の詞書きはなく、代わりに、「近江にて」24首、「京都にて」8首、「宇治にて」8首の構成となっていて、「近江にて」の中で石山を詠んだものは9首となっている。

次に昭和13年の『晶子自選歌集』では「心の遠景」からの抄出として、「近江にて」13首、「京都にて」3首、「宇治にて」5首が採られ、「近江にて」の中で石山寺を詠んだものは6首となり、「近江にて」以外の「京都にて」3首、「宇治にて」5首よりも多く採られていることは注目に値する。

寛もまた晶子と同じ「明星」で「石山より宇治へ」に50首詠んでいるが、そのうちの21首は石山の歌である。歌数が全体の約半数近くに及んでいることから、この旅の目的である石山の観月は注目に値する。

そこで以下に大正13年11月の「明星」「石山より宇治へ」を基に、石山での旅詠を取り上げ整理する。この大正13年「明星」に掲載された歌は、前述した昭和3年6月刊行の晶子の歌集『心の遠景』にも採られている。「明星」から『心の遠景』に抄出されたものには勉強出版『鉄幹晶子全集』の歌番号を入れた。また、歌に番号のないものは『心の遠景』に採られなかったものである。更に昭和13年刊行の『晶子自選歌集』に採られた歌には○印を付けた。

○261 粟津より石山寺に入る路の白き月夜となりけるかな

瀬田の川月の夜遊の場となりぬ田上山の籬の此方

262 吉備の国和気の郡の友も来ぬいかに明かさん近江の月夜

○263 山陰の石山寺の山門とやなぎの中に霧のまよへる

○264 かへりみて彼きき給へなど云はん教声もがな石山の寺

265 法の灯は不断のものと聞きしかど御堂よ月を掲げたるのみ

○266 石山の観月台に立ちなまし夜の明けんまで弥勒の世まで

○267 湖水より夜霧ほのかに上りきて二更を過ぎぬ観月の台

268 水に沿ひ月夜を歩む人人の悲しみとなる藻のにほひかな

○269 山はやく月を隠せば大空へ光を放つ琵琶のみづうみ

寛が天眠等に宛てた書簡でも願っていた晴天の美しい「石山秋月」の姿が「明星」上で詠まれていることがわかる。歌の詠まれた場が「石山秋月」であり、「観月台」であることから、月を詠むのは当然の成り行きではあるが、いかに石山の月を堪能したのかが理解できる。先に紹介した震災の時に晶子が見上げた「月」とは全く異なり、緊張から解放された「月」が表現され、縁の者との再会に話しの尽きない観月の夜であることが一連の歌から窺われる。

さて、晶子が訪れた当時の石山の案内は、デフォルメに特徴のある鳥瞰図を描く吉田初三郎の描いた「石光山石山寺案内：近江八景随一西國第十三番靈場」⁽¹¹⁾があるので以下に紹介する。

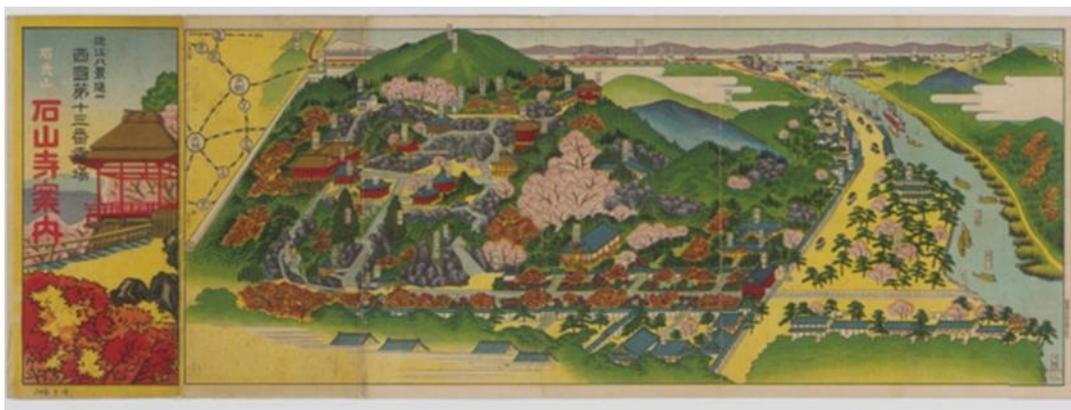


図 4・吉田初三郎「石光山石山寺案内：近江八景随一西國第十三番靈場」

そして石山寺の観月台と柳家との位置関係を確認するために図 4 を拡大したものが図 5 である。

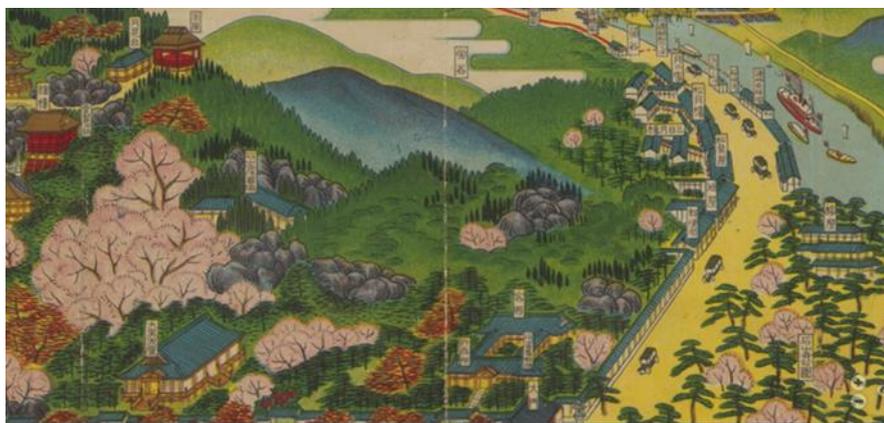


図 5・図 4 吉田初三郎「石光山石山寺案内：近江八景随一西國第十三番靈場」拡大図

図 5 の左上には石山寺「観月台」が見え、その麓の水際に「柳家」が描かれている。また、図 4 の裏面には石山寺の案内が写真と共に紹介されている。以下の図 6 である。



図・6 図4裏面

図6の写真の中に、晶子が「一隅の卓」で観月の場所と表記した「観月台の傍」の「観月台」すなわち「月見亭」が紹介されている。この観月台「月見亭」は後白河天皇が御幸の際に玉座として立てられた由緒ある亭である。図6の「月見亭」を拡大したものが次の図7である。



図7・図6拡大 月見亭

晶子はこの「月見亭」を

266 石山の観月台に立ちなまし夜の明けんまで弥勒の世まで

と、詠んでいる。ここが観月の為の玉座であることは上記でも述べたとおりであり、今なお一般の立ち入ることが許されていない。また、石山寺に確認したところ、晶子ら一行が観月の為に「月見亭」に立ち入ったということは伝えられていないとのことであるから、図7の「月見亭」の手前の辺り、すなわち「傍ら」で観月をしたものと思われる。

「月見亭」は本堂よりも少し標高の高い所にあり、より琵琶湖を見渡せる場所で、少しせり出した場所にあるため、遮るものなく月を眺めることができる絶好の場所なのである。

この「月見亭」の傍らでの「石山秋月」の観月によって、晶子が関東大震災に被災したその時に詠んだ恐怖と悲しみの「秋の月」から、その翌年には美しい日本の伝統美としての「秋の月」へと見事に文化的な「秋の月」が誕生している。

まとめ

「石山」の観月の旅は、関東大震災に被災し、灰燼と帰した「源氏物語」口語訳原稿のショックから晶子が一步踏み出すための、再生復興の要素を含んだ旅であったと思われる。大正13年10月の「石山から宇治へ」の旅の主目的は石山での観月であった。また、この旅が夫の寛の主導により計画・実行されたことは前掲の大正13年「明星」の「一隅の卓」で明らかである。

近江石山の月を観たいと云ふ良人の発議で、十月十二日の朝の汽車で東京を発ちました。

このように、晶子はいくまでも「石山」の観月は夫の寛の希望であったことを、わざわざこの旅の顛末を語る上で「明星」読者に周知させている。これは、同人や与謝野夫婦の縁者なら皆知るところの「源氏物語」口語訳の焼失で落ち込んでいた晶子に対して、紫式部が「源氏物語」執筆を始めたと言われる石山寺に、寛が誘い出したということ的印象づける。晶子としても寛の晶子に対するこのような思いやりが相当嬉しかったからこそ、わざわざ「良人の発議で」などと高らかに述べたものと思われる。晶子が旅の非日常によって気持がリフレッシュ＝「命の洗濯」されることで、また一から新たに「源氏物語」口語訳を執筆しなおすことを寛が大いに応援し励ましているのだということ、その寛の温かな気持ちを、晶子は「明星」読者とも共有したかったのではないだろうか。しかし、二人の大正13年「明星」の「石山より宇治へ」にはそのようなやりとりは何一つ描かれてはいない。むしろ、描かない美しさ、描かなくても理解できるその妙があったのではないだろうか。

晶子が被災した時に詠んだ「秋の月」は、この「石山」の観月の旅によって、「近江八景」の「石山秋月」となり、また新しい「秋の月」として作品世界で創造された。このことは、晶子の関東大震災による大きな精神的な被災から、復興再生へと導く引き金となったとも換言できるのではないか。

この「石山」の旅は、震災後初となる関西方面の旅であった。その場面で経済の中心、関西文壇の中心の「大阪」ではなく、「石山」を寛が選択したことは、晶子の為と限定されず、ひいては与謝野夫妻の主幹する「明星」の再生の狼煙をあげたことに通じる。震災から復刊した「明星」が、単なる復刊ではなく、新しく創造し前進する「復興」の気運をも掲げたのであろう。

〔注〕

- (1) 逸見久美 (2009・8)『新版評伝与謝野寛晶子大正編』八木書店
- (2) 植田安也子 逸見久美編『天眠文庫蔵与謝野寛晶子書簡集』(1983・5) 八木書店
- (3) 与謝野晶子 (1915・12)『歌の作りやう』金尾文淵堂
- (4) 佐藤春夫 (1954)『晶子曼荼羅』講談社(春夫は「付記」の中で、『晶子曼荼羅』は創作であるとしながらも、前半部は晶子から聞いた真実を書いたと述べていることから、「十五の少女」は真実であると思われる)
- (5) 逸見久美 (2002・10)『与謝野寛晶子書簡集成第 1 巻』八木書店
- (6) 植田安也子 逸見久美編『天眠文庫蔵与謝野寛晶子書簡集』(1983・5) 八木書店
- (7) 「近江八景」滋賀県 HP (<https://www.pref.shiga.lg.jp/kengai/interview/22105.html>)
- (8) ウィスコンシン大学マディソン校所蔵「Ishiyama Temple, from the series Eight Views of Omi Province」(1868-1925) <https://data.ukiyoe.org/chazen/images/4b5d8240b568af1706a08431aad400f3.jpg>
- (9) 房種『石山秋月』, 森治, 安政1. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1306915> (参照 2023-10-31)
- (10) 国際日本文化研究センター 古写真データベース 琵琶[湖]ヨリ石山寺眺望
掲載書名 YA032 写真 ID YA032028 滋賀県写真帖明治 43 年 10 月 滋賀県
<https://sekiei.nichibun.ac.jp/KSA/ja/detail/?gid=G0201676>
- (11) title 石光山石山寺案内 : 近江八景随一西園第十三番靈場 creator 新美南果
publisher 石光山石山寺事務所 date 不明 coverage 滋賀県 (*date 不明とあるが、推定は昭和初期) 所蔵国際日本文化研究センター
LICENSE:<https://creativecommons.org/publicdomain/mark/1.0/>

「参考文献」

- 逸見久美編ほか編『鉄幹晶子全集』1 巻～32 巻 別巻 1 巻～7 巻 勉誠出版
西村伊作『西村伊作人生語録われ思う』(1963) 文化学院
赤塚行雄『女をかし与謝野晶子 横浜貿易新報の時代』(1996) 神奈川新聞社
大津市歴史博物館「特別陳列図録 琵琶湖観光の幕開け」(1999)
逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子』明治篇・大正篇・昭和篇 (2007～12) 八木書店
大津市歴史博物館『近江八景』(2010) 大津市歴史博物館図録
出光美術館『名勝八景』(2019) 出光美術館図録
さかい利晶の杜企画展「災害を乗り越える晶子の意思」(2023)

「協力」

石山観光協会 土本晃
大本山石山寺
石柳

小清水 裕子 秋草学園短期大学 文化表現学科 非常勤講師